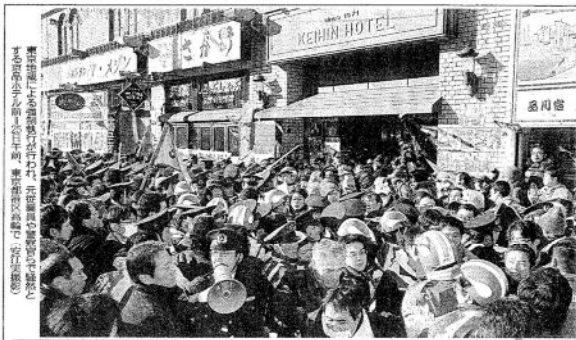


人通りの少ない日曜日の早朝・力づくで労働者を排除！
これが職を奪われる労働者に対する国家権力の本質だ！
私たちは、このような強権的・非民主的な対応を絶対に許さない！



京品ホテル 強制執行 明け渡し拒む元従業員ら退去

昨年1月に強行した強制執行を撤回し、元従業員ら退去。明け渡し拒む元従業員ら退去。明け渡し拒む元従業員ら退去。

昨年1月に強行した強制執行を撤回し、元従業員ら退去。明け渡し拒む元従業員ら退去。明け渡し拒む元従業員ら退去。

1月25日、普段は人通りが少ない日曜日の朝、品川高輪口駅前には機動隊と労働者の怒号で騒然とした状況となりました。不当にも解雇された「京品ホテル」の労働者たちが自主営業を続けている建物の明け渡しと撤去を命じる仮処分が裁判所によって下されたために、強制執行が行われたのです。

雇用問題が深刻化している中で、このような対応に疑問を感じます。

「太陽のない街」

人権であり、自主営業。自主営業は争議の平和的な手段である。わたしの憤りが収まらないのは、五十年前、わたし自身、三カ月ほど「自主生産闘争」をやったことがあるからだ。このときは、都の労働委員会が斡旋、和解している。その後も、労働組合による生産闘争はめずらしくなかった。機動隊と生活を守る手段、機動隊執行は最悪、非民主的な強権解決である。裁判官の人権感覚を疑う。労働争議に警察隊を出すのは戦前の話。徳永直の太陽のない街は、東京都文京区共同印刷の労働争議がテーマだが、日本経営者連合会（JFE）の経営者連合会が、一九一九年の作品である。頭は、戦前行っていた。戦後に戻ってこい！（ルボライター）

飛ぶ怒号届かぬ声

元従業員「必ず戻ってくる」

京品ホテル強制執行 96日間に及んだ自主営業

「強制執行反対」「営業は続けたい」。解雇後も自主営業を続け、強制執行に抵抗する元従業員ら。執行官に同行した監視員の機動隊は、力づくで元従業員や支援者を排除していった。東京・品川駅前の京品ホテルは25日、騒然とした空気に包まれた。「必ず職場に戻る」。元従業員らは法廷闘争を続ける方針だが、職場復帰できるかどうかは厳しい情勢だ。

「利益も出た」

自主営業は、元従業員らに「利益も出た」。元従業員らは、自主営業を続け、利益も出ている。元従業員らは、自主営業を続け、利益も出ている。